

上にかくも多くの意味を読みこむものは著者の主観でなければならぬ。實に本書をかくの如き形にまで作り上げたものは著者のその郷土に對する深き愛であり、紙面上に於いてそれに接することが本書を通讀するもの、喜びである。尙本書はその後半に於いてかくの如き研究の資料もなつた寛永平安町古圖以下十七種の古地圖をコロタイプを以つて収録し、それに一々親切なる解説を施してゐる。唯惜しむべきはその圖版の或るものが餘りに細微にして不幸擴大鏡を以つてするも猶その文字を判讀するをえないもののあることである。かくの如きは種々の事情もあることであらうが、今少しく大きく、且つなるべく一枚々々自由にこり離して、解説と共に見うるが如く印刷製本することは出来ないものであらうか、且つ瑣細なことはあるが各地圖にその原寸（若しくは寫眞としての縮尺）を明記して欲しい。著者に第二輯刊行の意あるを聞き特に附記する。（四六倍判、本文一六五頁、圖版二四葉、定價六、〇〇圓、京都ス、カケ出版部）

〔柴田〕

## ●大垣市史

### 大垣市役所編

近來各縣市町村に於て其他の郷土史を編纂することが盛んになつて來たが、今又本市史が編纂刊行されるに至つたことは洵に喜ばしい事である。大垣は美濃國の西部平野の中樞に位し往古東大寺の一莊園たりし大井莊より發達し、今日に至るまで一千有餘年、戰史上、文化史上極めて興味ある史實に富んだ所である。市當局は大正六年より本市史の編纂を企て、大正八年に郷土史の權威者伊藤信氏に之を依頼した。爾來伊藤氏は公務の餘暇東西に奔走して史料の蒐集に努め、殆んど獨力を以て編纂に當り、拮据十年にして此の一大市史を完成されたのである。上巻は通史にして上古より現代に至る大垣市の一般史を述べ、上古の大垣地方、大井莊時代、戸田家以前の大垣、戸田家時代、明治大正昭和時代の五編に分ち、中巻は分科志にして市街、神社、寺院、學藝、教育、治水、災害、産業、交通、人物、風俗、史蹟名勝等の諸編とし下巻は資料編にして古文書及び金石文を收めてある。就

中大井莊關係文書は伊藤氏の最も苦心蒐集されたものであつて、通史の大井莊時代史と相俟つて莊園制度の研究に資するところ多大である。尙ほ是等古文書金石文には句讀點及び訓點を施して世人の讀解に便にし、卷末には市史年表及び索引を附してある。(菊判上中下三卷、二千六百餘頁、大垣市役所發行、價不明)(松野)

●花 祭 早川孝太郎著

三河國北設樂郡を中心として行はるゝ花祭に關した極めて精密な記録である。それは十二月又は一月に行はれる、舞を中心とした行事で神下し―舞ひ―神下し―舞―神上げの順序を以て行はれ、舞ひには假面を用ひるこいふ。信遠の國境に近き三河の山地に於て冬のさなか灼熱せる興奮の中に夜を徹して行はるゝこいふ事を考へて見るだけでも限りなき興味である。その地に近く生れた著者は柳田國男氏の影響をうけつゝ、その民俗學的調査に從ひ今この前後二編あはせて千六百頁の報告を出されたのである。畫家である氏は多數の自作の畫を加へ他の寫眞

と共に理解を助けて居る。その記述は容觀的觀察に忠實にしてつぎめて論斷を避けてゐる。従つてこの行事がもつ種々の意味については殆ど語られて居ない。これは「其批判が至つて乏しく、解説の甚だしく臆病で」あつて「結論が今はまだ下されて居らぬ」ことを「何よりも嬉しい」にして序して居らるゝ柳田氏の主張が自らこの書の構成に現はれて來たものと思はれるがかる行事のもつ意味こいふ事は必しも學者が外部から附加へるものではなくその行事の中に自ら含まれてゐるものではあるまいか。即その行事者及觀衆がそれによつて何を期待し又それをいかに受容して居るかこいふところにその意味があらはれて居るのである。それは客觀的な行事の型とは違つて捉へにくいものかも知れないが必しも不可能ではないと思ふ。この大著をなされた著者の眞摯なる努力に深き敬意を表すると共に望蜀の願ひこしてこの事を書き加へて置く。これは民俗學が内面的な人生學となる爲に必ず辿らなければならぬ道であると思ふからである。(菊判二冊、前編七一頁、後編八七〇頁、價貳五、〇〇圓、